

## フランシスカンの展望としての世俗性 SECOLARITÀ IN PROSPETTIVA FRANCESCANA

今回この集いに招待していただき感謝しております。皆さんと1日だけでも一緒にしたいので、ローマでの Definitorio の仕事から抜け出してきました。コロナ禍以前の A と GP の多くのすばらしい集まりが思い出されます。今回も参加したかったのですが、できなかったのが、今日皆さんと会えて、とりわけ嬉しいです。ありがとうございます。

### 聖霊による世俗性

フランシスカンの展望としての世俗性について語るよう依頼を受けました。

まずはこの「secolarità 世俗性」ということばについて述べたいと思います。「Secolarità 世俗性」とは、キリスト者にとっての世界との真の関わりを意味し、みなさんにとってのとくべつなカリスマ(召命)です。

まず明確にしたいのは、「Secolarità 世俗性」とは在俗宣教会特有のものではありません。それはこの世界に生きるキリスト者ひとり一人の真の次元です。したがってわたしたちはキリスト者としてこの世界との関係を営まなければなりません。その意味で、「Secolarità 世俗性」は教会全体の次元です。すなわち司祭や修道者を含む、すべてのキリスト者の次元です。なぜならわたしたちはこの世界に生きているからです。ヴァチカン第 2 公会議の *Gaudium et spes* (現代世界憲章)が教えるように、教会はこの世界に生きているのであり、「人類とその歴史とに、実際に深く結ばれていることを自覚している」のです<sup>1</sup>。

洗礼を受けた者すべてにとって真実であるこの全体的方向性の中であって、皆さんのようにこの世界との関係に自らの召命を見出す人々もいます。そこで、キリスト者全員の共通要素である「Secolarità 世俗性(以後、世俗性と呼ぶ)」は、「世界にある」ことを自らのとくべつな霊的インスピレーションとして捉える者にとっては、特別なカリスマともなります。優れた神学者であるジョヴァンニ・モイオーリが言っていたように、それは「霊(スピリト)による世俗性」なのです。なぜなら聖霊自らがこのインスピレーションを与えるからです。19 世紀後期から 20 世紀初頭にかけて、どのように在俗宣教会が生まれたかを思うと、それが理解できます。当時信徒たちは、様々な理由で、教会の中における自らの召命を、*Azione Cattolica* (カトリック・アクション)などのグループを通じて、気づき始めました。「*Gioventù femminile di Azione cattolica* (若い女性のカトリック・アクション)」を創立したアルミーダのことを考えてみましょう。神の国に捧げた生き方は、「奉獻される」価値のある真の召命であることに気づくでしょう。世俗に身を置く信徒として、この奉獻を通じて徹底的にこの世俗性を生きたい、これが霊(スピリト)による世俗性です。

アルミーダ・バレッリを、そして彼女に続いた姉妹たちを突き動かした世界への情熱は、こうして理解できます。世界への情熱、なぜなら「神が愛し、そのためにひとり子をお与えになった」世界なのだから。<sup>2</sup> これが神の国が成長する世界、芽を出し、どのようにはか分からないが知らぬ間に育つ種、大きな木ほどに育つ小さなからし種です<sup>3</sup>、神の国は神の霊とその愛の力によって変容する世界そのもの、キリストによってすでに幕上げされた世界、そして歴史が織りなされる中、キリストの最後の来臨まで成長を続ける世界。世界は神の召命の真髄なのです。

アルミーダ・バレッリ、そして彼女と共に皆さんも、この世俗性は奉獻に値するものと理解されました。皆さんが奉獻された世俗性は、あなた方が御国の酵母として、待たれるあの新しい世界の種として生きることを通して、神ご自身の聖性をあらわします。あなた方がその宣教者となったキリストの王性は、彼が告知したあの王国の十全の成長です。

<sup>1</sup> *Gaudium et Spes* 1 現代世界憲章 1

<sup>2</sup> Cfr Gv 3, 16. ヨハネ 3, 16

<sup>3</sup> Cfr Gv 3, 16.

皆さんの召命である、この美しい奉獻された世俗性について、多くを語りたいのですが、今回は時間が足りません。

### 世俗性のフランシスカンの特徴

それよりも、フランシスカンの霊的家族の中で、世俗性を中心にして生まれたこの皆さんの宣教会の召命におけるフランシスカンの次元について語りしたいと思います。

会設立の時期に、アルミーダ・パレッリの横にアグスティノー・ジェメツリ修道士がいたことが影響を与えたことは確かですが、この世俗性という特徴が決断されるにあたって、フランシスコ会修道士がいたという単なる偶然が影響したとは考えられません。むしろ、霊的世俗性とフランシスカンの霊性の間に深い *sintonia* (調和、繋がり) があるのです。

それでは、この世俗性とフランシスカニズムの *sintonia* (調和、繋がり) について、いくつかの要素をご紹介します。

### 兄弟愛の霊性

前述の深い *sintonia* (調和、繋がり) についての最初の要素としてあげられるのは、フランシスカンの霊性における、兄弟性という特徴で、兄弟姉妹の存在は中心的要素です。フランチェスコ自身もその「遺言」で、自らの回心の始まりをライ病者たちとの出会いに位置付けています。これらの苦しむ、疎外された兄弟たちは、彼にとっては「憐みの実践」のしるし、神の啓示だったのです。神は他者の姿を通して自らを啓示するため、フランチェスコにとって他者は神の秘跡なのです。このことは、フランチェスコのキリスト者としての冒険の始まりの時だけに起きたのではなく、人生のあらゆる時に起きました。兄弟は、彼らとの関係における困難を軽視せず、ずっと本質的な要素であり続けます。

そのように、神に出会うためには他者の存在が必然的に重要であることは、世俗性へのインスピレーションとの大きな *sintonia* (調和、繋がり) を表わします。「他者との関係」は世俗性の本質的な次元です。実際、わたしたちが生きている世界は、自然界だけではなく、人間関係から成る「社会という世界」です。世俗に生きる者は、出会う人々と膨大な量の関係を結びます。そしてフランシスカンの展望は、それら一つ一つを神との出会いの機会として生きることができるよう助けてくれます。自分と神との関係を保つのに他者を立ち入らせない必要はなく、人々は神とわたしの関係を妨げません。わたしたちはフランシスカンとして、出会う人それぞれに、神の存在のしるしを見るよう招かれています。

### 賛歌: *Ecologia integrale* (包括的エコロジー)

*sintonia* (調和、繋がり) の第 2 の要素は、つくられしもの (創造された世界) についてのフランチェスコ的ヴィジョンです。ここで本質的に関係するのは「つくられしものの歌」または「兄弟太陽の歌」と呼ばれるあの賛歌です。ここでは、「創造された世界」と「人間の歴史」の中に神の眼差しが感じられます。太陽、月、水、空気、大地、火、について歌う節に見られる自然界の中だけでなく、赦し、忍耐、病い、苦難などを通して得られる不思議な平和を歌う節のように、人間社会の中にもあるのです。現代では「*ecologia integrale* (包括的エコロジー)」と呼ばれているアプローチがあり、内的につながっている自然環境と社会環境からなる「共通の家」の世話をすることを意味します。このようなふるまい方は、世俗に生きる人と調和します。世俗に身を置く人は今や世界との関係において、自然環境やソーシャル・インテグレーションのテーマを見つめ、それを管理し進めて行かなければなりません。フランシスカンの霊性は、今日の世界で急務とされる、自然環境と社会を巻き込むあの「*ecologia integrale* (包括的エコロジー)」を目指すにあたって、その解釈の鍵を与えます。

### アクション

フランシスカンの霊性のもう一つの要素はアグスティノー・ジェメツリがその著書「*Il francescanesimo* フランシスカニズム」の最後の章で、現代生活におけるフランシスカニズムの使命について語る中で、「いま」必要なのは「*azione* (アクション) の重要性」だと述べています。実際、フランチェスコは生涯隠遁所に住むことを選びませんでした。隠遁所はフランシスカンの霊性の一要素ではありましたが、彼にとっては、人々の間での活動的生活の中

で休息の時を過ごす場所でした。フランチェスコの生活においては、活動は本質的な要素で、活動においてこそ聖霊の存在を発見するのです。

フランチェスコが自らの霊的インスピレーションをまとめたキーワードの一つに、「すべての上に主の霊とその聖なるわざ (operazione) を求めよ」<sup>4</sup>。という招きがあります。すなわち、霊と operazione (わざ)、すなわち azione (アクション、行動) を、一致させているのです。そしてそれは、わたしたちの行動が信仰に基づいたものでなければならないというような狭い単なる倫理的解釈にゆだねられるべきではなく、聖なる operare (わざ) の内に聖霊の存在を認めるといふ、より深い意義を認めるべきです。あの彼の体験、ライ病者たちに「fare misericordia 憐みのわざを行なう」(「fare=行なう」すなわち「agire=実行する」であることを強調します) ことによって、自らの魂も体も、苦さを甘美さに変えてくれた聖霊の働きを体験した記憶に支えられているのでしょう。

ライ病者たちへの聖なるわざは、フランチェスコにとって聖霊の現れでした。したがってフランチェスコはわたしたちにも同様にしよう招きます。そうすることによって、生の中、出来事の中、とりわけわたしたちの行動の中に、よりよく行なうよう、わたしたちのわざが常により聖なるものであるよう、助言する聖霊の働きかけを識別できるのです。

この行動や実践への気づかいは、あらゆる面で、おこない大切に世界に生きる世俗者の体験と深く結びついています。

わたしたちの世界の危険性はまさに行動主義にあるということをわたしたちは知っています。それは行動自体の意味を失った活動によってわれわれを疲労させます。このようになってしまった世界では、フランシスカンの展望が最高に適しています。それはわたしたちのおこないを中止させるのではなく(そんなことは不可能ですが)、そこに神の霊のしるしを、神自身がそれを通して語る「時のしるし」を認め、新しい自覚をもって生きることです。

#### 人間関係的貧しさ

フランシスカンの霊性は貧しさというテーマで知られています。ここでは、世の財を使って生き、活動し、商売する「世俗性」との調和は認められないのではないかと考えられます。しかし聖フランチェスコのこぼれに注意深く耳を傾けてみると、彼が語る「貧しさ」とはとりわけ他者との関係の中で生きるものであって、それは大いに「世俗的」なのです。

- 1 心の貧しい人々は、幸いである、なぜなら、天の国はその人たちのものである。(マタイ 5,3)
- 2 祈りや聖務日課に執心し、断食や禁欲的修行に励む多くの者がいる。
- 3 しかし、自分に対する侮辱と感じたひと言のゆえに、あるいは、何かが自分から取り去られたときに、憤慨し、すぐにいらつく。
- 4 このような者は「霊的乏しさ(心の貧しさ)」を知らない。なぜなら、真に「霊的乏しさ」を知る者は、自分自身を憎み、頬を打つ者を愛す。

興味深いのは、貧しさとは何かを問われてフランチェスコは「断食や苦行に励む」者たちではなく、2つの人間関係を例として挙げます。自分が侮辱を受けた者と、自分の物と思っていた物を取り去られた者の例です。その状況下で真に貧しい者であるかどうか、このような難しい人間関係を忍耐強く我慢できるかどうか、明らかになります。これがわたしが「povertà relazionale 人間関係的貧しさ」と呼ぶもので、世俗生活の中、あなた方皆さんが生きるよう呼ばれているものです。この、人間関係的貧しさは、minore(小さい)という形容詞で表現され、フランチェスコが自身と兄弟たちのために選んだ「frati minori 小きき兄弟会」もそれです。Minoreとは一番小さいという意味で、わたしが先にお話した「人間関係における貧しさ」のことです。そのような振る舞いの結果としてもたらされるのは、自由と喜びです。

この貧しさが世俗生活においていかに貴いかは、わたしより皆さんの方がご存じだと思います。守るべき何も、失うべき何もない者として、フランシスカンとして話し、行動する時、すべての物の使用、すべての事柄からの離脱によって自由に生きるゆえに、皆さんは真の喜びを体験されることでしょう。

---

<sup>4</sup> Rb 10, 10).

## 宣教

フランシスカニズムと世俗性の *sintonia* (調和、繋がり)に関する最後の要素は、宣教というテーマだと思えます。このテーマはとりわけ皆さん「Missionarie della Regalità 王たるキリストの宣教者」にとっては心惹かれるものだと思います。アッシジのフランチェスコの書き残したものの中で「宣教」には「世界に赴く」という言い方が使われています。会則では、事実、「いかに兄弟たちは世界に赴くか」という章があり、そこでは宣教とはまず第一に証しであると書かれています。より明白には、第一の会則では「サラセン人や他の異教徒の間に行く者たち」、すなわち今日宣教者と呼ばれる者についての1章があります。

かれらの間では2つの霊的振る舞い方がある。一つは、喧嘩したり議論したりせず、むしろ神の愛ゆえにすべてのつくられしものたちに従い(1ペトロ 2,13)、キリスト者であると告白すること。もう一つの方法は、神がお望みと分かれば、全能の神、父と子と聖霊、すべての創造主、そして贖い主であり救い主である御子を信じ、洗礼を受け、キリスト者になるよう、神のことばを告げること。<sup>5</sup>

最初の振る舞い方は、沈黙の、謙虚な、他者への従順な証しかたで、訊ねられた場合にはキリスト者であると言うことを恐れないが、議論、喧嘩、討論を避ける方法。第2の方法は、福音を述べ伝えてもよいが、それは「神がお望みと分かれば」。

これは、大声で叫ぶ攻撃的な福音宣教を避け、福音の証し人として謙虚に静かに世に身を置いているあなた方にとっても大いに有益なことばではないでしょうか。フランチェスコ的に言えば、あなた方の「世界に赴く」方法こそ、あなた方の福音活動の、宣教者としての存在の、真髄なのです。わたしよりよくご存じだと思いますが、このように振舞うには、皆さんが「隠れた存在」であることに助けられていると思います。それによってあらゆる場所、グループ、人々の間に自然に入っていき、自らの証しの光をもたらすことができるのです。

## 最後に

最後に述べたいと思います。聖霊にインスピレーションを受けた在俗性とフランシスカンの霊性における在俗性、それらがフランシスカンの召命を受けている「王たるキリストの宣教者」のカリスマの内に響きあっているようです。この2つの次元を論理的に分けてみましたが、みなさんひとり一人の生の中で、それらは一つであると思えます。なぜなら、カリスマというのは理論ではなく、各人がそれぞれ解釈する生だからです。これにおいてもまた皆さんは(わたしたちも)フランシスカンなのです。各人の個(唯一であること)の深いリスペクト。もし他の霊性が、皆が同じような立派な兵士であるよう養成したとしても、わたしたちの家では「他者と同じフランシスカン」は見つからないでしょう。そして「会」はこの特徴をよく反映しています。同じ一つのカリスマを幾千の異なるかたちとして生きるのですが、わたしたちを結んでいるのは一つの「様式」です。みなさんの召命のめぐみ(*gratia*)とは、世俗性とフランシスカン性が同時に存在することです。

---

<sup>5</sup> Rnb 16, 5-7.